

富岡製糸場と 深谷の偉人たち



渋沢栄一



尾高惇忠



葦塚直次郎



国宝「東置繭所」

【設立の背景】

江戸時代末期に幕府は鎖国を解き外国と交易を開始し、1859（安政6）年に横浜などを開港しました。その当時主な輸出品として生糸と蚕種の需要が急激に高まりましたが、そのころの日本は伝統的な手動の繰糸法である座繰製糸であったため、良質で質の揃った生糸を大量生産できず、また、粗悪品やにせものを輸出して不当な利益を得ようとする商人が増えて問題となりました。

このような問題に対し諸外国から強い不満が出され、さらに外国資本導入の動きもありました。こうした問題を解決する目的で国の資本による模範器械製糸場の設立が1870（明治3）年2月に決定されました。

【建設地の選定】

政府は生糸に精通したフランス人ポール・ブリュナに製糸場建設のための「見込書」を提出させ、彼を指導者として仮契約を結びました。ブリュナらは当時養蚕が盛んであった長野、群馬、埼玉の各地を実地踏査した結果、製糸に必要な繭と良質な水だけでなく、工場建設に必要な広い土地、器械製糸に必要なボイラーの燃料である石炭（亜炭）が近くで確保できたことなどから、群馬県富岡の地が選ばれました。

保存整備が完了した国宝「西置繭所」



富岡製糸場は1872（明治5）年に明治政府が製糸業の近代化を図るために設立した官営模範工場であり、もっこつれんがぞう木骨煉瓦造の特色ある当初の建物群が140年以上経った現在もほぼ建設当初のまま保存されています。民間に払い下げられた後、主要な建造物群はそのまま活用され、製糸技術の革新に伴い必要な増改築を行いながら115年間生産活動を続けました。1987（昭和62）年の操業停止後、2005（平成17）年に富岡市の所有管理となり敷地全体が国史跡に、翌年には設立当初の9件の建造物が国重要文化財に指定されました。また、2014（平成26）年6月には「富岡製糸場と絹産業遺産群」として世界遺産登録され、同年12月には重文のうちの3棟、東西の置繭所と繰糸所が国宝に指定されました。



国宝「繰糸所」

富岡製糸場の設立には、現在の深谷市出身の渋沢栄一、尾高惇忠、葦塚直次郎などが尽力しました。

【富岡製糸場が果たした役割】

富岡製糸場は官営模範工場として日本各地に器械製糸技術を伝え、器械製糸場の設立を進める役割を果たしました。富岡製糸場で生産された生糸は当初はフランスへ、やがてアメリカへと輸出されました。明治末期には日本の生糸の生産量・輸出量はともに世界一となり、世界的な絹の大衆化に貢献したと考えられます。

【設立に関わった人々】

器械製糸場設立の緊急性を感じた大隈重信、伊藤博文の協議により官営模範製糸場設立が決まりました。当初は民部省が所管し、渋沢栄一や杉浦謙、尾高惇忠などが担当し、中心的役割を果たしました。

設立の指導者としてポール・ブリュナと雇入れの本契約を結び、また建物の設計のために横須賀製鉄所の製図工だったオーギュスト・バスティアンを雇い入れました。その他にブリュナの人選によってフランス人の生糸検査人、技術者、繰糸教師、医師らが雇い入れられ、富岡製糸場の設立や操業に関わりました。



「佛人ブリュナー一行」(片倉工業寄託資料)

建築資材は、日本で調達できない一部の資材以外は近辺で調達されました。木材や礎石は近隣の官林や山から切り出し、煉瓦はフランス人技術者の指導のもと瓦職人が隣町で作りました。

一方、日本人の体格に合わせた300人取りの繰糸器械や動力用の蒸気エンジン、窓ガラスや鉄製の窓枠などはフランスから輸入しました。



首長館



世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」は、高品質な生糸の大量生産に貢献した、19世紀後半から20世紀の日本の養蚕・製糸の分野における世界との技術交流と技術革新を示した絹産業に関する遺産です。

日本が開発した生糸の大量生産技術は、かつて一部の特権階級のものであった絹を世界中の人々に広め、その生活や文化をさらに豊かなものへと変化させました。



■見学についてのお問い合わせ

富岡製糸場 〒370-2316 群馬県富岡市富岡1番地1
総合案内所 TEL: 0274-67-0075

2023.9

【活躍した工女たち】

1872（明治5）年2月より工女募集が行われましたが、「フランス人が工女の生き血を採って飲む」という噂が流れるなどしたため、順調に集まりませんでした。政府は「告諭書」を何度も出すとともに、初代場長の尾高が娘の勇を率先して入場させた結果、33道府県から工女が集まりました。

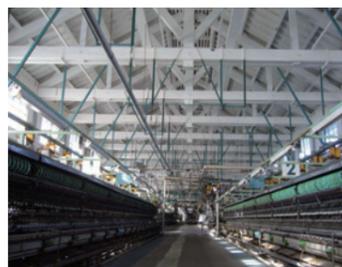
創業当初の富岡製糸場で働く工女の生活は、労働時間は季節により異なるものの、1日平均7時間45分で日曜は休み、給料は繰糸技術の等級により格付けされた月給制、また宿舎や病院が場内にあり、食費や医療費は国が負担するなど、当時の日本では先進的な労働環境でした。工女の中には、技術習得後は故郷に戻り指導者として活躍する者もあり、器械製糸技術の伝播に貢献しました。

【建物の特徴と価値】

創業当初に建設された主な建物は、木材で骨組みを造り、壁面の仕上げに煉瓦を用いる木骨煉瓦造で建てられています。小屋組みにはトラス構造が用いられており、繰糸所には中央に柱のない大空間が出現しています。また、当時の日本はまだ照明設備が不十分であったため繰糸所にはガラス窓を多用することで自然光を最大限に利用しました。明治初期に造られた木骨煉瓦造建築で大規模なものとしては、日本で唯一完全な形で残るものです。



錦絵「工女勉強之図」(富岡市立美術館所蔵)



国宝「繰糸所」内部

渋沢栄一（しづさわえいいち）

1840(天保11)年.2.13~1931(昭和6)年.11.11



「近代日本経済の父」と呼ばれる渋沢栄一は、現在の深谷市血洗島に生まれました。7歳の頃から、いとこの尾高惇忠に論語をはじめとする学問を習いました。

20代で栄一は、惇忠らと倒幕計画を試みましたが、大激

論の末、計画を中止します。その後、京都へ逃れ一橋(徳川)慶喜の家臣となり、領内の経営面で力を発揮します。慶喜が15代将軍の座につき、意に反して幕臣となりますが、慶喜の勧めで、1867(慶應3)年1月、慶喜の弟、徳川昭武に随行して渡欧し、ヨーロッパの社会制度・文化・思想に大きな影響を受けました。1868(明治元)年11月、幕府が倒れたため帰国、1869(明治2)年11月、大隈重信に説得され明治新政府に仕官します。

明治初期、日本最大の輸出品であった生糸生産のための模範工場を政府自らが、富岡の地に建てることになりました。富岡製糸場設立にあたっては、当時、明治新政府の大蔵少輔であった伊藤博文と大蔵省租税正の栄一が担当となり計画が進められました。農家出身で蚕桑に詳しかった栄一は、富岡製糸場設置主任として尾高惇忠、葦塚直次郎らと共に建設に尽力しました。

富岡製糸場が操業を開始した翌年の1873(明治6)年、33歳の時、栄一は大蔵省を退官し、以降、実業界で大きな功績を残していくこととなります。第一国立銀行を

はじめ、設立などに関わった企業は約500社に及びます。また、社会福祉事業にも熱心で、養育院への関与をきっかけに数多くの病院や学校づくりに尽力するなど、600以上の社会福祉事業に関わりました。さらに、国際親善にも寄与し、世界中の人々と幅広く交流しました。



旧渋沢邸「中の家」(深谷市指定文化財)

尾高惇忠（おだかじゅんちゅう）

1830(天保元)年.7.27~1901(明治34)年.1.2



尾高惇忠は、現在の深谷市下手計に生まれました。学問に優れており17歳の頃、自宅で塾を開き、近隣の子どもたちに学問を教えました。

いとこの渋沢栄一の師でもあり、栄一は藍香(惇忠)ありて青淵(栄一)ありと尊敬し、その考え

に大きな影響を与えました。惇忠は10代で水戸学の影響により尊王攘夷思想を抱くようになり、高崎城乗取りや横浜商館焼き討ち計画を栄一らと共に企てますが、

やがて、栄一が徳川慶喜に仕えるようになると、佐幕派(幕府を補佐する)へと考え方を变えていきました。

1870(明治3)年1月の「備前渠取入口事件」では、地元農民の先頭に立ち、事件解決のため同志と共に、力を尽くしました。これが縁で新政府に招かれ、民部省に入ります。そして、官営富岡製糸場の建設に計画当初から携わり、活躍します。建設資材の煉瓦やモルタルは、当時の日本ではとても珍しいものでしたが、煉瓦づくりを地元深谷の葦塚直次郎に、また、煉瓦を接着するための目地材は日本固有の漆喰を改良してまかなうことを考えて、同郷の左官職人、堀田鷺五郎・千代吉親子に任せました。富岡製糸場の煉瓦積みは、この漆喰によって長年にわたり強固な壁面を形成しています。また、娘の勇を伝習工女第1号として故郷下手計から呼び寄せました。富岡製糸場初代場長となり、特に工女の教育に重点を置き一般教養の向上をはかり、風紀の乱れには厳しく場内の規律を維持したそうです。惇忠の誠実な人柄に人々は信頼を寄せ、自分の娘を富岡製糸場の工女の一員とすることが誇りであると考えられるようになりました。「至誠神の如し」とは、たとえ能力や才能がなくても、誠意を尽くせば、その姿は神様のようなものだという言葉です。惇忠はその言葉を掲げ、1876(明治9)年にその職を退くまで、富岡製糸場のために誠意を尽くしたのでした。



尾高惇忠生家(深谷市指定文化財)

葦塚直次郎（いらづかなおじろう）

1823(文政6)年.10.5~1898(明治31)年.1.27



(個人蔵)

現在の深谷市明戸出身の直次郎は、富岡製糸場の建設において資材調達のみとめ役をつとめた人物です。製糸場は洋式の建物となることが決まっていたのですが、明治時代となって4年あまりの当時ですから、それがどんな建物

なのか、想像することも非常に困難なものだったことでしょう。主要な建築材料となる煉瓦は、まだその製造方法すら分かっていない中、直次郎は地元明戸の瓦職人たちを束ね、フランス人技術者から煉瓦の素材や性質を聞き、材料である粘土探しからはじめました。そして、富岡に近い笹森稲荷神社(現甘楽町福島)付近の畑から煉瓦に適した粘土を発見し、その周辺に焼成窯を設け、試行錯誤の末に、煉瓦を焼き上げることに成功したのです。

その他にも、石材の輸送や瓦など、多くの資材調達を請け負った直次郎は、製糸場完成後の1875(明治8)年、笹森稲荷神社の本殿に大絵馬を奉納し、事業の成功を神に感謝しています。製糸場を東上空から見下ろした構図の絵馬は、甘楽町指定重要文化財となっています。

直次郎は、1880(明治13)年に永明稲荷神社(深谷市田谷)にも同様の絵馬を奉納しており、これは深谷市の指定文化財となっています。



富岡製糸場図大絵馬(深谷市指定文化財)



刻印の入った煉瓦



フランス積み煉瓦



■お問い合わせ

深谷市 渋沢栄一記念館
〒366-0002 埼玉県深谷市下手計1204
TEL: 048-587-1100 FAX: 048-587-1101



2023.9

尾高勇（おだかゆう）

1858(安政5)年頃~1923(大正12)年.1.30



(個人蔵)

尾高惇忠の長女として1858(安政5)年頃、現在の深谷市下手計に生まれました。1872(明治5)年14歳の勇は、製糸伝習工女の第1号となります。

その背景には、製糸場の創業に向けて工女を募集したものの、生き血を取られるという噂が立ち、一向に応募者が現れなかったという事情がありました。この次第を

聞いた勇は、父の心中を察すると共に、新たな技術の習得に胸を躍らせて富岡製糸場への入場を決めたのでした。勇の決断は同じ下手計村の少女たちを刺激し、松村倉(17歳)をはじめ5人の少女が、さらに倉の祖母和志は62歳の高齢ながら志願して入場し、工女取締役となりました。

